

白河街区・岡崎遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

白河街区・岡崎遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第14冊目として、このたびマンション新築工事に伴います白河街区・岡崎遺跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

平成15年2月

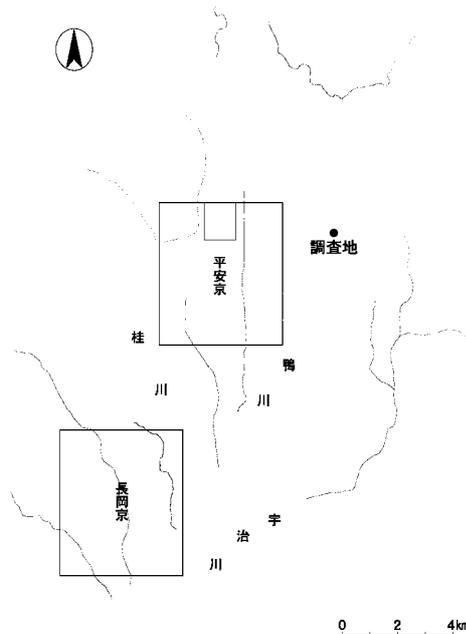
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区・岡崎遺跡
- 2 調査地点所在地 京都市左京区岡崎天王町52
- 3 委託者及び承諾者 セントラル総合開発株式会社 大阪支店
常務取締役 支店長 小笠原幸成
- 4 調査期間 2002年2月5日～2002年3月25日
- 5 調査面積 365.2m²
- 6 調査担当職員 吉村正親
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「吉田・岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用方位・座標値 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 挿図の土器類に通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 13 作成担当職員 吉村正親

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	2
(1) 第 1 期 (平安時代 ~ 鎌倉時代)	2
(2) 第 2 期 (中世)	3
(3) 第 3 期 (江戸時代前期)	5
(4) 第 4 期 (江戸時代後期 ~ 明治時代)	6
3 . 遺 物	7
(1) 第 1 期 (平安時代 ~ 鎌倉時代)	7
(2) 第 2 期 (中世)	7
(3) 第 3 期 (江戸時代前期)	8
(4) 第 4 期 (江戸時代後期 ~ 明治時代)	8
4 . ま と め	8

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 東トレンチ全景 (北から)
		2 西トレンチ全景 (西から)
図版 2	遺構	1 SG15 (北西から)
		2 SG15完掘状況 (西から)
図版 3	遺構	1 SK17 (北から)
		2 SE22・49・50 (北から)
図版 4	遺構	1 SX42 (北から)
		2 SX42 (西から)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (北から)	2
図 3	調査風景 (西から)	2
図 4	第 1 期遺構平面図 (1 : 200)	3

図5	第2期遺構平面図(1:200)	4
図6	第3期遺構平面図(1:200)	5
図7	第4期遺構平面図(1:200)	6
図8	東壁断面図(1:100)	7
図9	出土土器実測図(1:4)	8
図10	周辺調査配置図(1:400)	9

表 目 次

表1	遺構概要表	2
表2	遺物概要表	8

白河街区・岡崎遺跡

1. 調査経過

調査地は、左京区岡崎天王町52に所在し、北を丸太町通に面した閑静な住宅地の中にある。現在の周辺環境は、北に岡崎神社・東本願寺岡崎別院・大谷専修学院があり、その背後には金戒光明寺や真正極楽寺などの寺院があるほか、東には永観堂や南禅寺、西は平安神宮などの寺社が点在する地域である。地理的環境から見てみると、北に神楽岡・吉田山があり、東には比叡山から繋がる東山があり、その両者に挟まれた白川の谷が開ける所で、西に開けた扇状地の様相を示している。その結果、山から大量の白川砂が運ばれ、当トレンチでも厚く堆積していた。現在ではマンションや住宅が建ち並ぶ住宅地だが、戦前までは聖護院大根や牛蒡を中心とする畑地が広がっていた。

この地にマンション建設が計画され、新築工事に先立って京都市埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が行われた。その結果、昭和63年度の発掘調査¹⁾で検出した東光寺に関連すると思われる方形池の西北部や、他の遺構も確認されたため、発掘調査をする事となった。

今次の調査は、平安時代中期に建立された東光寺に関連する遺構や白河街区の遺構確認を目的として行った。

調査は排土置き場確保のため、トレンチを東端部に東西約8m・南北約30mの東トレンチ、南端部に南北約8m・東西約27mの西トレンチを設定した。その結果、逆L字型の形態となった。重機によって現地表下約1.3～1.5mまで排除し、その面を最終面とした。また排土はすべて場内処理した。

調査の結果、平安時代中期から江戸時代にわたる溝・柵列・池・井戸・土壇跡など多数の遺構を検出した。

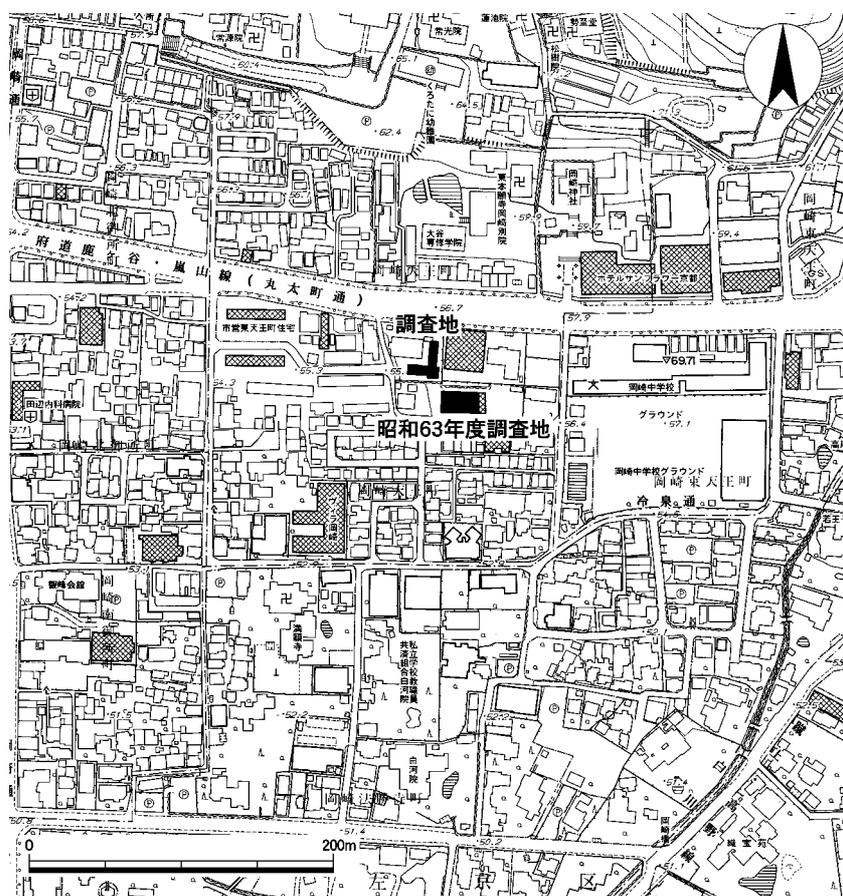


図1 調査位置図(1:5,000)



図2 調査前全景（北から）



図3 調査風景（西から）

2. 遺 構

調査区は全面が宅地であったため、近世末期の遺構から検出する事となった。また、近世末期の遺構面から平安時代中期の遺構面まで標高差はほとんどなかった。

(1) 第1期（平安時代～鎌倉時代）

東光寺と白河街区に関係すると思われる土塋・溝・柵列・池跡を確認した。

SK17は、東トレンチの北端に同時期の遺構とは隔絶した位置にある。トレンチの関係上、土塋の東肩・西肩を検出する事はなかったが、不定形の土取り土塋と思われる。遺物から平安時代中期の遺構である。当トレンチで平安時代中期までさかのぼれる唯一の遺構である。

SD2・4は、試掘塋によって分断されていたものの、最終的には南北幅2mの東西溝で、西に向かって流れていた。溝の両肩は、ほぼ垂直に切り落とされていたものの、石組などで補強した遺構は確認されなかった。この溝は遺物から上下2層に分けられ、この時期は下層面にあたる。溝のラインは白河街区の区画ラインと一致するものの、詳細は不明である。

SD2・4によって切断されたSK30～32・41・54・55は、遺物から平安時代後期から鎌倉時代にかけての土塋であるが、いずれも小規模で、詳細は不明である。

SG15は、拳大の川原石を中心とした荒い石組が確認された。昭和63年度の調査で確認された

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代～鎌倉時代	SD2・4下層、SG15、SK17・30～32・41・44・45・54・55
中 世	SD2・4上層、SE13・14・59、P25・26・37～40、SD27、SK53
江戸時代前期	SK8・9・11・12・20・21・28・47・51・58、SD29・36、P33・34・43
江戸時代後期～明治時代	SK1・18、SD16、SE22・35・49・50、SX42

SG 1 と石組の状態や出土遺物の時期が一致する事から、同一の池と考えられ、その池の北西端部分を検出したものと思われる。遺物から12世紀後半代の下層と、13世紀前半の上層の2期にわたって埋没していた。この遺構は東光寺内にあった方形の池と推測された。

期待された東光寺関連の遺構は方形池のみであるが、柵列や溝はほぼ東西南北に規画されたものであることから、東光寺や白河街区を区画する遺構と思われる。

(2) 第 2 期 (中 世)

SD 2・4 は、第 2 期で上層部まで完全に埋没した事が確認された。溝の上層部は下層と異なり、やや大きめの石や瓦が混入している事から、東光寺や周辺の寺社から一括して廃棄され溝が埋没

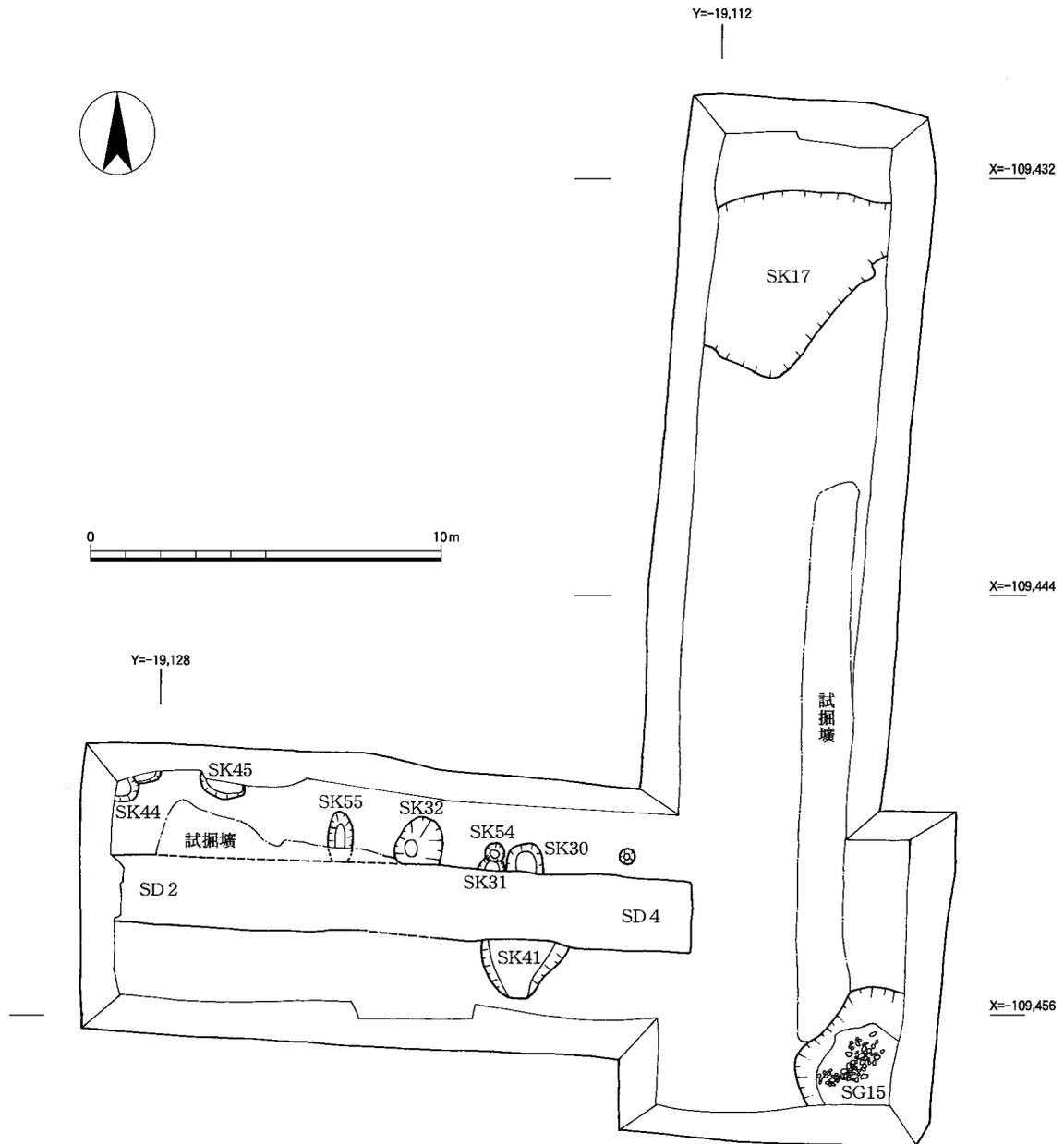


図 4 第 1 期遺構平面図 (1 : 200)

したものと思われる。

柵列 (P 25・26・37～39) は、ほぼ南北軸上に規画されたもので、底部には平坦な石が礎石として1～2個ずつ置かれていた。

柵列とともに同一ライン上から小規模な溝SD27が検出された。

また、トレンチ北端に並ぶSE13・14・59は、素掘りの浅い井戸跡と思われる。

応仁の乱以前まで東光寺があった事が知られているが、柵列の他は寺院に関連する遺構は確認されなかった。また、東光寺が廃寺になった後も戦国時代には、しばしば合戦場になっている事から、あまり土地利用が行われなかったものと推測される。

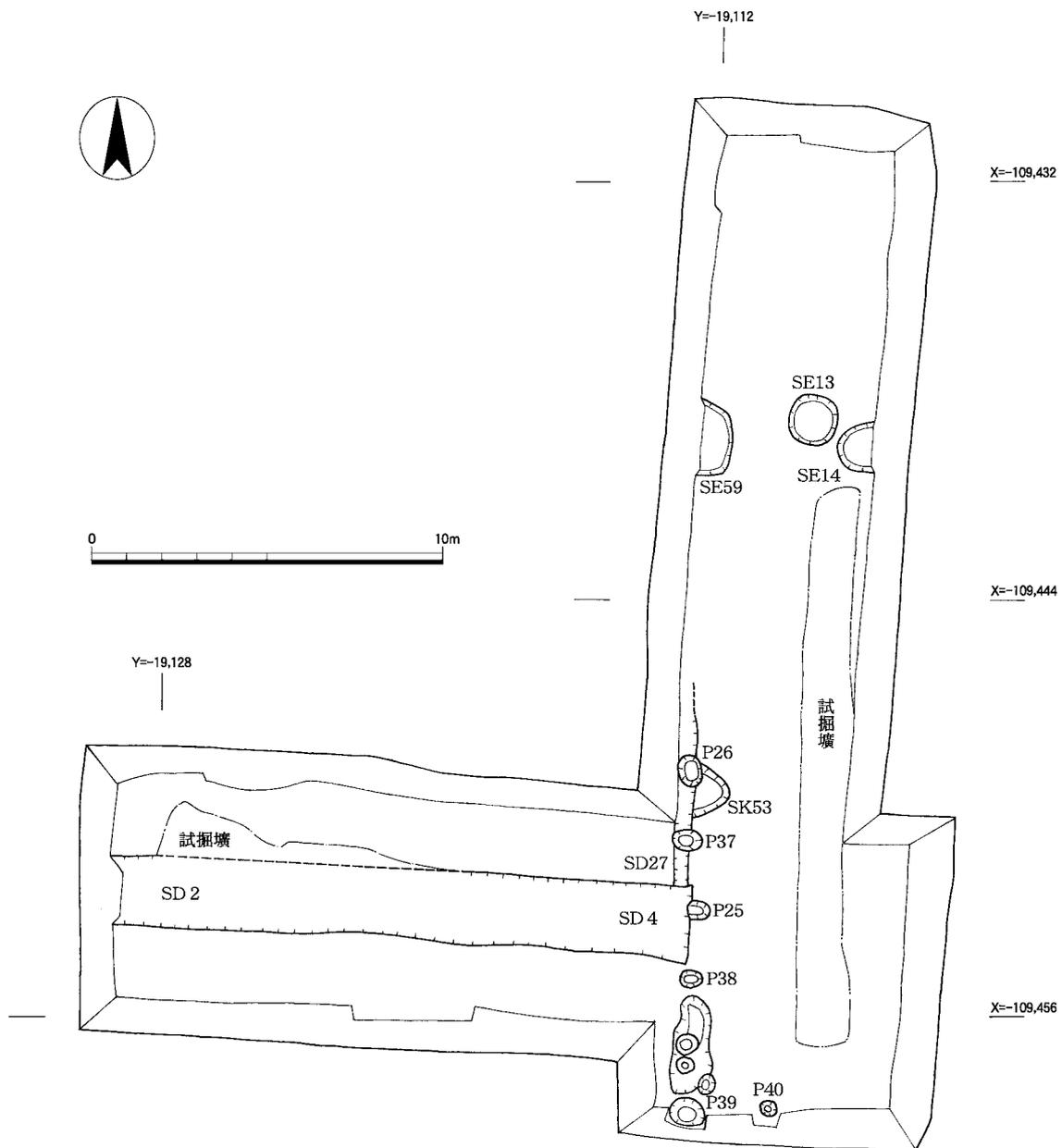


図5 第2期遺構平面図(1:200)

(3) 第3期(江戸時代前期)

東トレンチ北辺に、浅い小規模な円形の土壌が密集していた。

西トレンチでは、2条の耕作溝と思われる小溝SD29・36が、東西に平行する形で検出された。

また、トレンチ南西端部分でピット状の遺構がやや密集していた他、植樹の跡と思われる土壌も確認された。

この時期には畑地が中心と思われる。

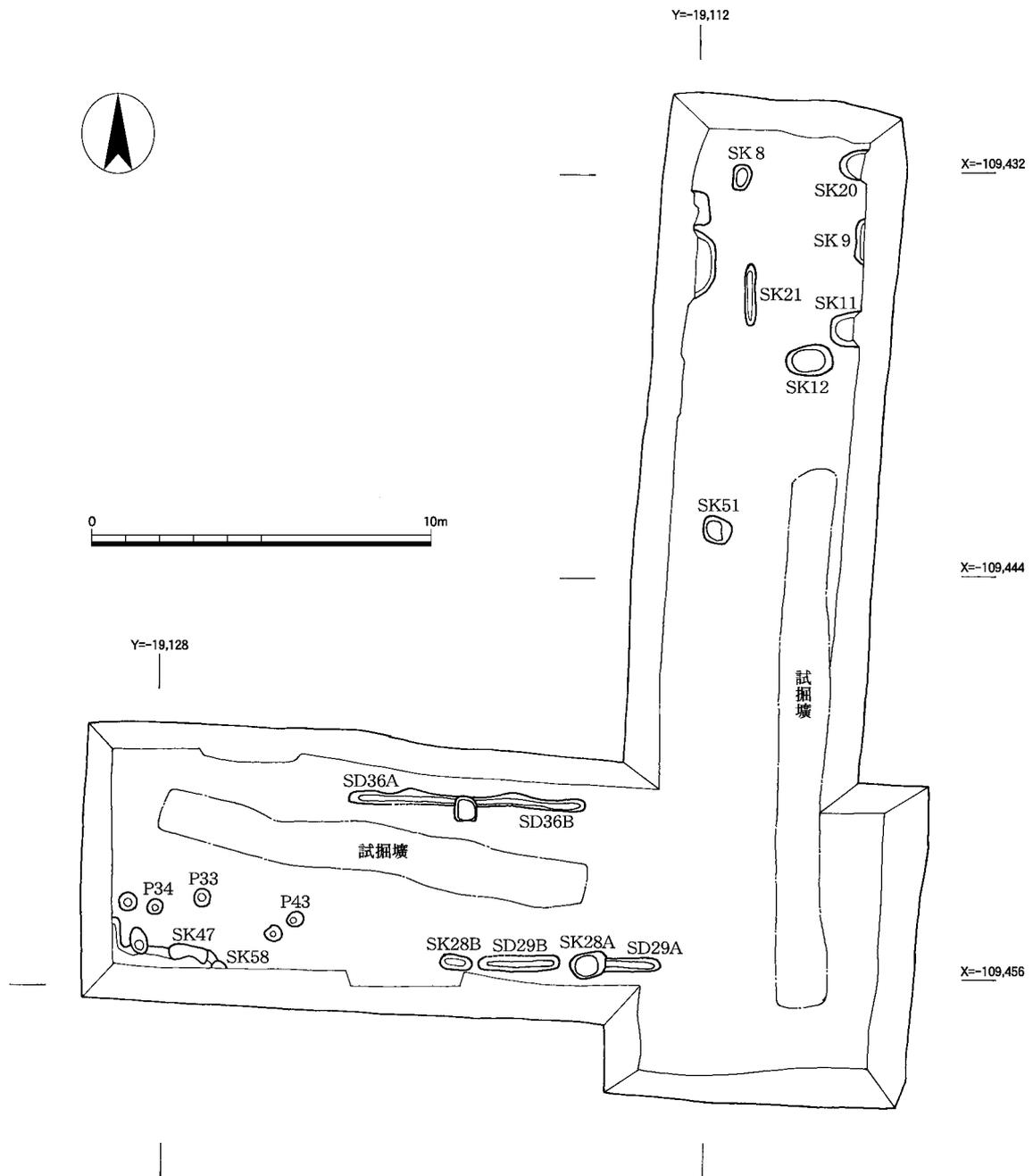


図6 第3期遺構平面図(1:200)

(4) 第 4 期 (江戸時代後期 ~ 明治時代)

SD16は、東西軸に規画されたV字状の深い溝である。この溝からは平安時代から明治時代までの遺物が出土した。これは疏水建設以前に白川からの用水路として作られたものと思われる。

SX42は「コ」字型の石敷遺構で、南北の石敷面内にやや大きめの礎石が確認された。西半部は破壊され、寺院か屋敷の四脚門と考えられる。

この石敷に北西に隣接する形でSE22・49・50と石組による井戸があり、連続して掘り替えられていた。SE35も同様に石組井戸と思われる。

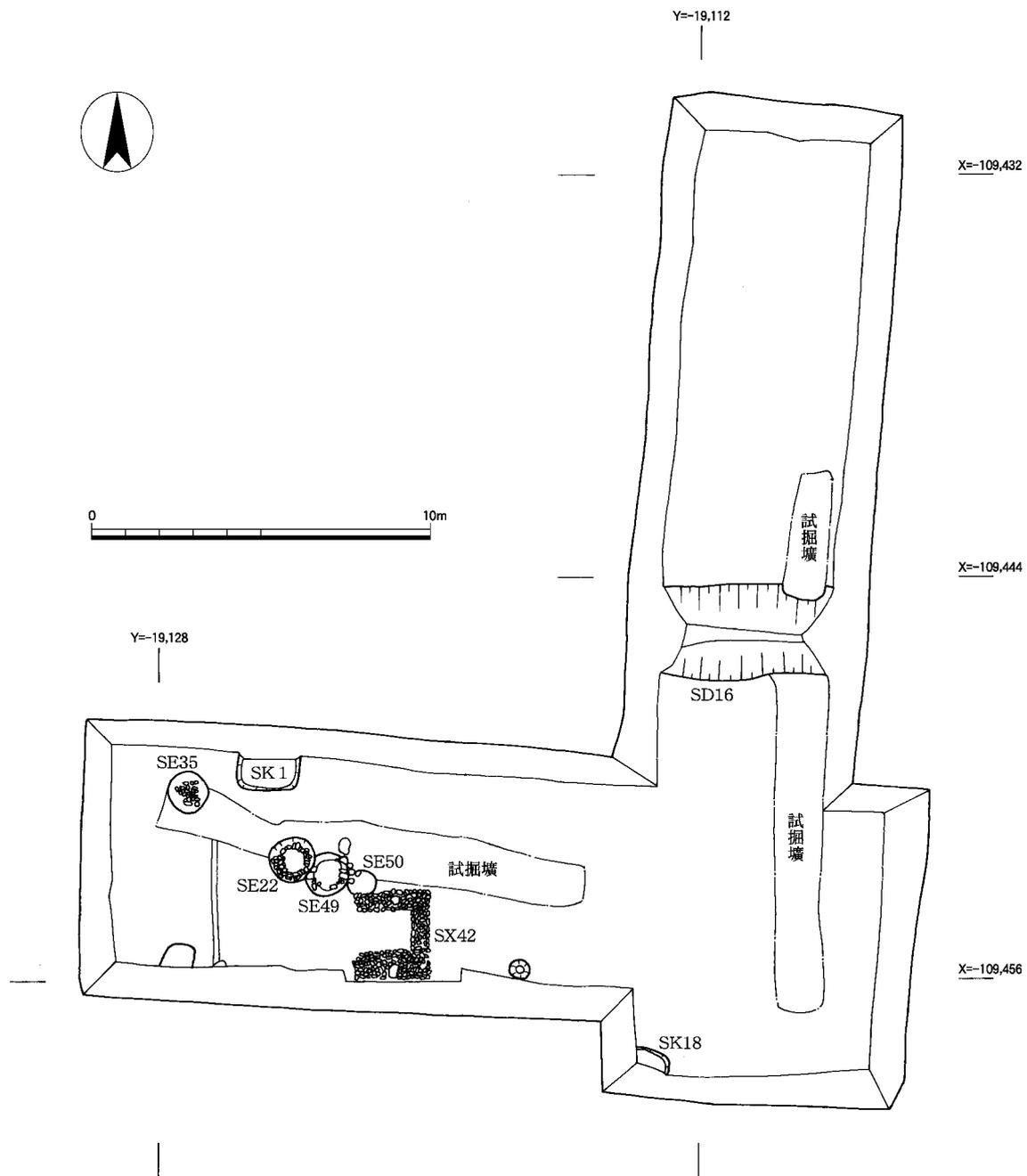


図 7 第 4 期遺構平面図 (1 : 200)

SK 1は垂直に掘り下げた深い土壌で、多くの遺物が混入していた。

また、三角形や方形の埴が多量に出土した事から寺院跡ではないかと思われる。

3. 遺物

古墳時代後期の須恵器杯と土師器甕片が採取されたが、どちらも新しい遺構面での混入であった。

(1) 第1期(平安時代～鎌倉時代)

SG15から土師器・瓦がまとまって出土した。SG15の遺物は下層が12世紀末、上層～中層からは13世紀前半の土師器皿・瓦が中心である。

図9の2～10は、すべてSG15の中層から出土したもので、13世紀前半の土師器皿(中皿、小皿、コースター形)であり、ほぼ同時期と考えている。

SD 2・4の下層は試掘墳によって主体部が失われていたために出土量は少なかった。

SK17からは平安時代中期の土師器皿片がまとまって出土した。

(2) 第2期(中世)

SD 2・4の上層は下層と異なり、やや大きめの石と共に、鎌倉時代から室町時代にかけての瓦や土師器皿がまとまって出土した。特に軒瓦や飾り瓦の出土例が多い事から、東光寺か周辺寺院から一括して廃棄されたものと思われる。

図9の1は、SD 2より出土した褐釉四耳壺片である。中世に関わる輸入品である。

柵列からは南北朝から室町時代の土師器が出土し、SE13・14からは室町時代の土師器皿や瓦質の羽釜・火鉢片が出土したものの出土量は少

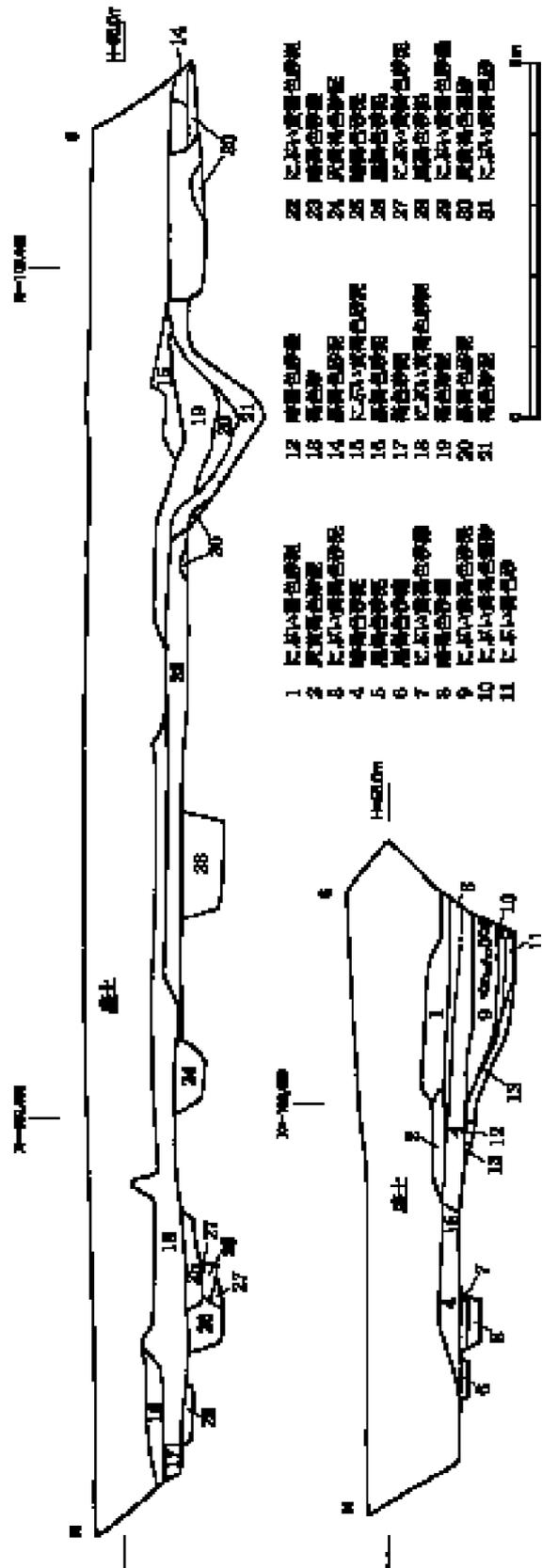


図8 東壁断面図(1:100)

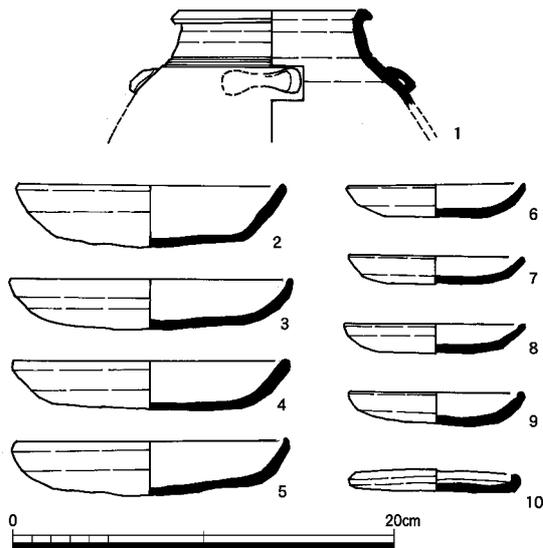


図9 出土土器実測図(1:4)

なかった。

(3) 第3期(江戸時代前期)

東西両トレンチの遺構や遺構面から、土師器皿や染付・施釉陶器・焼締陶器などの日用雑器類が少量ずつ出土した。東トレンチ南西端のやや粘質の地固め層から裏に「分」の銘を持つ寛永通寶が出土した。第4面と比較して日用雑器の割合が高い。

(4) 第4期(江戸時代後期～明治時代)

東西両トレンチの遺構や遺構面から、土師器皿や染付・施釉陶器などの日用雑器がまとまって出土した。S D 16の溝の中から明治時代の染付の雑器から平安時代の軒瓦までが出土した。また、磁器の香炉や花瓶・施釉陶器の合子などの高級品もあり、道具瓦や鬼瓦がまとまって出土したことから禅宗系の寺院があったものと推測された。

4.まとめ

今回の調査は、白河街区と東光寺に関する遺構・遺物の確認をする事であった。その結果として東光寺境内と思われる池を確認する事ができた。一方、平安時代から中世にかけて東西に規画された溝と南北に規画された柵列が確認された。

白河街区は平安時代後期、六勝寺建立と同時に当地区周辺に新たに開かれた。今回の調査で確認された池・溝・柵列は白河街区の区画溝の他、出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代が中心

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器	8箱		5箱	2箱
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦		土師器9点		
中世	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、飾り瓦		褐釉陶器1点		
江戸時代前期	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、飾り瓦、塼、銭貨	1箱		0箱	1箱
江戸時代後期～明治時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、道具瓦、鬼瓦、塼	45箱		0箱	45箱
計		54箱	10点(1箱)	5箱	48箱

である事などが一致する。ただし遺構数や遺物が少ない事からこの地まで白河街区の影響が及んでいたかは不明である。

昭和63年度に行われた発掘調査で確認されたSG 1 と今回の調査のSG15を検討してみたところ、川原石による石組と遺物が12世紀後半～13世紀前半の瓦と土師器皿を中心とする事から同一遺構である事が推定された。その結果、この池は東西約30m・南北約16m、東西南北ともほぼ直線上に規定された長方形の池として復元できた。東光寺は平安時代前期、当地域にあった貴族の別業を寺院としたものであった。承平3年（933）には東光寺の園池は邸宅を巡る池を持つとされている事から今回検出された池跡とは全く別の遺構であると推測される。

今回の池は長方形である事から、平安時代後期、東光寺もしくは東光寺鎮守の天王社（現：岡崎神社）の放生などの儀式や祭祀のために作られたものであり、鎌倉時代に何らかの理由で放棄されたものと思われる。

そもそも東光寺は、元慶年間（877～885）に陽成天皇の母である藤原高子が天皇の御願寺とし

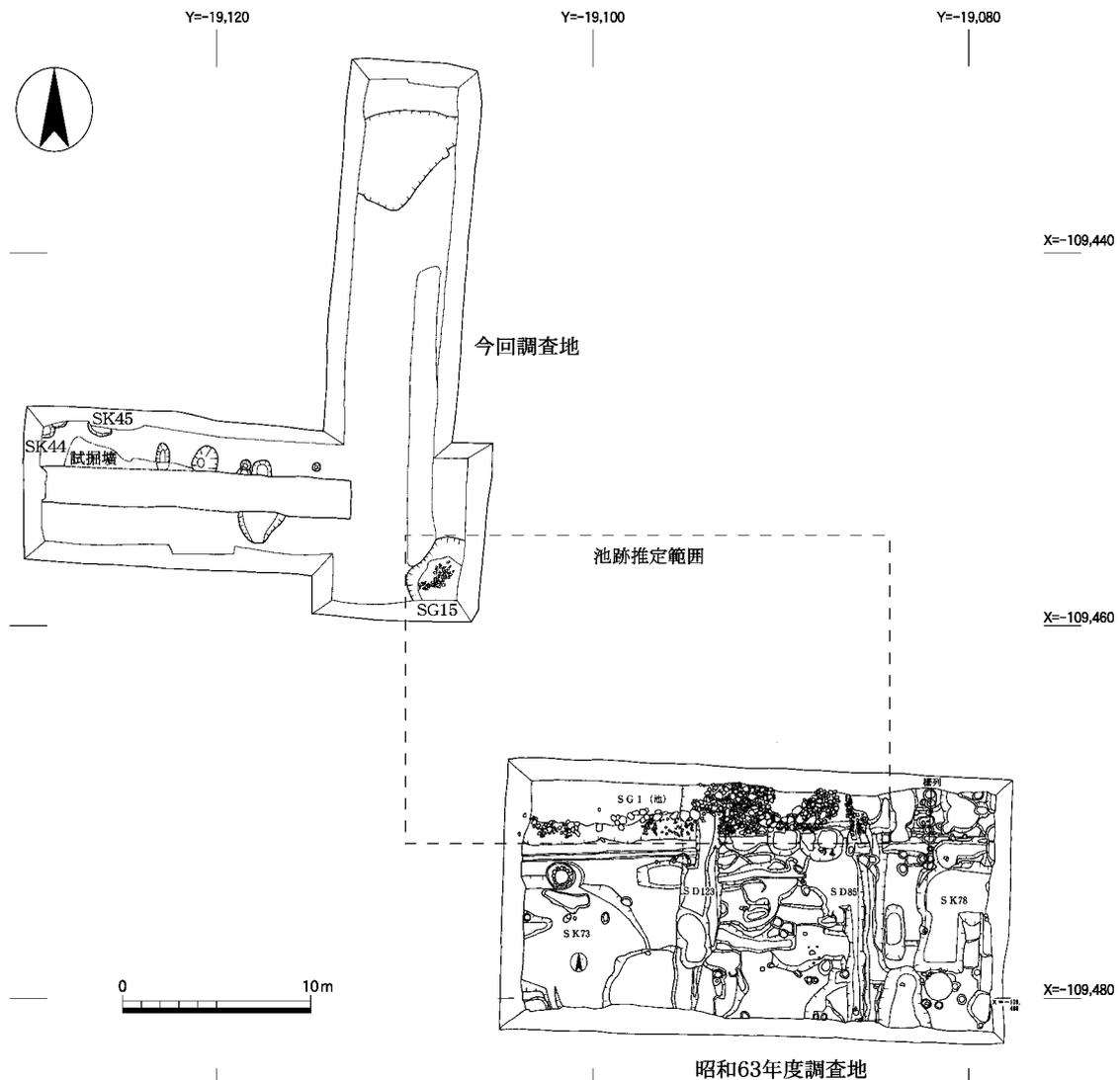


図10 周辺調査配置図（1：400）

て建立したのが始まりである。天皇の譲位後も、延喜5年(905)には定額寺となっている事が確認されている。平安時代前期から当地周辺は貴族の別業地として知られた所であり、東光寺のように寺院となる例も多い(禅林寺・円成寺など)。一方、『保元物語』では「法勝寺の北、東光寺の辺」と書かれ、『山槐記』には朝廷の奉幣使が東光寺に派遣されている事、東光寺の御旅所が焼失した事が記されている。出土遺物の点からも、ほぼ同時期のものが主体となっている事から、平安時代後期から鎌倉時代全般にかけては、東光寺は寺院としてのまとまりがあった事が確認される。ただし、今回の調査では池跡と柵列の他には遺構が検出されなかった事や、平安時代中期のSK17が土取穴であった事から、東光寺の中心寺域は当トレンチよりも東にあったものと推測される。

応仁の乱で当地区周辺は3度に渡り合戦場となり、法勝寺・東光寺共に焼失している。南禅寺や禅林寺・黒谷は再建されているが、東光寺は廃寺となり、法勝寺・円成寺は近江坂本や奈良に退転している。東光寺が廃寺となった後も、戦国時代はしばしば合戦場となっていた事から、当地域の積極的な土地利用を試みられていない。この土地が利用されるようになったのは江戸時代になってからであるが、水利に恵まれなかった事から、主に畑地としての利用であった。江戸時代後期になると、当トレンチ西南端で周辺寺院の子院か蓼倉薬師関連の寺院が建立されていたものと推測される。明治になると、東西の溝が建設され近郊農家による畑地が維持された他、平安神宮周辺での開発により民家が建てられるようになったものと推測される。

註

- 1) 堀内明博「白河街区・岡崎遺跡2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいく・おかざきいせき							
書 名	白河街区・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-14							
編著者名	吉村正親							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらかわがいく 白河街区	きょうとしさきょうく 京都市左京区 おかざきてんのうちょう 岡崎天王町52	26100	400	35度 00分 48秒	135度 47分 26秒	2002年2月 5日～2002 年3月25日	365.2m ²	建物建設
おかざきいせき 岡崎遺跡			401					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
白河街区	寺院跡・ 邸宅跡	平安時代 ～鎌倉時代	池・溝・土壇	土師器・瓦				
岡崎遺跡	集落跡	古墳時代	なし	土師器・須恵器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-14

白河街区・岡崎遺跡

発行日 2003年2月28日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961